

■ 対円&対ユーロでドルの強気はなおも続く…！？

昨日（8/8）の欧米時間入りあたりからドル/円は111円割れの水準に値を沈める格好となっている。特段の材料があったわけではなく、基本的には調整主体の展開と言えよう。夏季休暇シーズン入りでポジション調整の動きも出てきやすい。

もちろん、本日（8/9）米ワシントンで行われる日米通商協議（FFR）という重要イベントを控えて、しばし様子見を決め込んでいる向きも多いものと推察されるし、なかには事前にとりあえずポジションを整理しておこうと考える向きもあろう。

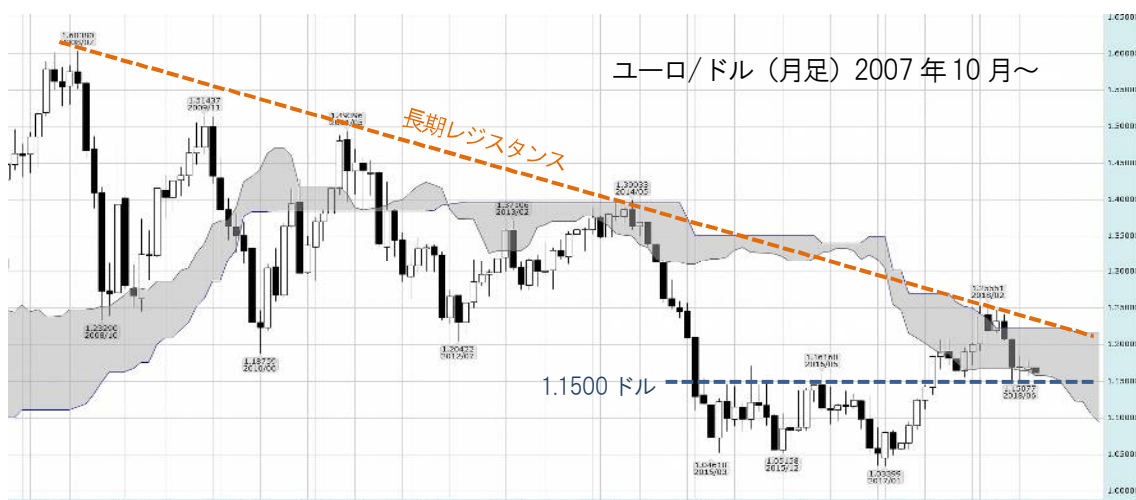
今回のFFRについては「初会合」ということもあり、何らかの具体的な結果が示されるということもなかろう。よって、場合によっては事前の過度な警戒が緩み、イベント通過後は一旦ドル高・円安方向に振れる可能性が大いにあると個人的には見込む。

日米ともに互いの意向、要求の内容はとうにわかりきっている。目玉は「農業」と「自動車」であり、関税引き上げを回避するために日本はある程度、米国製品のお買い物をする必要に迫られるのであろう。おそらく米政府側も同じように考えているはずであり、互いの手の内を熟知するという意味では、米中や米欧の関係とはかなり異なる。そもそも閣僚級の実務担当者による協議なのであるから、これまで予想だにできなかったような方針が突如打ち出されたり、いきなり突飛な発言が飛び出したりすることもなかろう。

むしろ、なおも戦々恐々なのは中国と欧州であり、周知のとおり、中国人民元はすでに対ドルで大幅な値下がりを見ている。もちろん、ユーロ/ドルも今年2月高値＝1.2555ドルから見れば8%近くの値下がりとなっているが、筆者は「そもそも1.2555ドルはあまりにも買われ過ぎ」であると当時も考えていたし、いまとなってはそう確信している。

あらためて下図を見てもわかるのだが、あのときの1.2555ドルというのは2008年7月高値から2017年1月安値まで下げに対する38.2%戻しであり、なおかつ当時はちょうど長期レジスタンスラインが位置するところでもあった。つまり、そこは純粋に（単純に？）テクニカルが支配する時間帯だったわけで、その実、節目に到達した後は見事なまでに相場が反転・下落することとなった。

昨年8月以降、ユーロドルの月足はずっと一目均衡表の月足「雲」の下限と上限の間を歩き来するような格好となっており、ここ数カ月は「雲」下限の水準が下値サポートとして機能している（5月、6月、7月の終値はいずれも「雲」下限を下抜けなかった）。



今後、この月足「雲」下限をクリアに下抜け、相前後して1.1500ドルの節目をも下抜ける展開となれば、そこからは一気に下余地が拡大することとなる。その場合、一つには昨年1月安値から今年2月高値までの上げに対する61.8%押し＝1.1200ドル割れあたりの水準が当面の下値の目安ということになるものと思われる。

（08月09日 11:00）